ボクの大好きなヒト

神田春希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ボクの大好きなヒト

【Ｎコード】
Ｎ８９７０Ｈ

【作者名】
神田春希

【あらすじ】
ボクはユナが大好き。ユナに名前を呼ばれると、とても嬉しくて、尻尾をぶんぶんと振って答える。ねえ、ユナ。ユナはボクのコト、好き――？

no. 1

ユナ、泣かないで。
僕は大丈夫だから。
ちょっと。
ほんのちょっとだけ、眠たいだけなんだ。

ユナは大粒の涙をこぼしながら、僕の名前を呼ぶ。
頭を、体を、優しく撫でてくれる。
僕はそんなユナの優しさを感じて、鉛のように重たい自分の体を恨めしく思う。

変だな、どうしてだろ、寝ている場合じゃないのに。
僕はまどろむ意識を何とかしようとするけど、
抗えず、ゆっくりと眠りに落ちていく。

とろりとした感覚があって、小さいユナを思い出す。

ねぇ、ユナ。
君は覚えているかな？
僕がまだ小さかったころ、ユナも子供だったときのことを。

僕はその時、なぜだかとても窮屈な暗い所に居たんだ。
暑いし、喉は渇いたし、とってもおなかが減っていたっけ。
周りに僕と同じくらいの誰かが居たけど、
だんだん動かなくなってきて、返事もしてくれなくなっちゃって、
僕はとっても寂しくなって、悲しくなって……そんな時上のほうか

ら急に光が差し込んできたんだ。

「わんちゃん？」

眩しくて、何にも見えなかったけど、ユナ、君の声はよく聞こえたよ。

鈴みたいな、きれいで、透明な声。

僕はもう嬉しくて、たまらなく嬉しくて、声のするほうに飛び出して行ったんだ。

眩しさに目が慣れて、初めて君の顔を見た。

すると、君は大きな目から大粒の涙をこぼして居たんだ。

僕はびっくりした。

だって、目から水が出てくるんだもん。

ぺろっとその水を舐めてみたら、なんだかちょとしょっぱくて、不思議な味がして……

そしたら君は僕をぎゅっと抱きしめて、こう言ったね。

「わんちゃん。よくがんばったね。

寂しかったでしょ？　怖かったでしょ？　よく――がんばったね」

僕にはその時よくわからなくて、ユナを見つめるだけだったけど、今ならわかるよ。

あの時、僕は兄弟たちと一緒にダンボールに入れられて、ゴミ捨て場にぽいって捨てられてたって。

ユナ。僕の兄弟を助けれなかったことで、優しい涙を流してくれてありがとう。

僕、ユナのこと大好き。

ユナも僕のこと、好きかな？

好きだと嬉しいな。

no. 2

僕はユナの家に来た。
最初おかーさんってヒトにユナが怒られた。
僕のせいなのかな？

僕、ここじゃなくてもいいよ。
なんとか生きていけると思う。
ユナにそう言ってみたけど、言葉が通じないんだ。
僕はもどかしくて、寂しくなった。
僕も言葉をしゃべることが出来たらよかったのに。

その後、おとーさんってヒトが来て、
おかーさんと何か話してたんだ。
そしたらおかーさんが
「好きにしなさい」ってユナに言って、
ユナは僕をぎゅーって抱きしめた。

僕はちょっと苦しかったけど、ユナの笑顔を始めてみたから、
とっても嬉しかったんだ。

おとーさんも、おかーさんも、僕とユナを見て笑顔になった。

あぁ、そうか。
僕、ここに居ていいんだ。
いらないって言われないんだ。

僕、ユナに出会えて、本当によかった！！

僕は嬉しくて、嬉しくて、尻尾ってやつをぶんぶん振り回した。
僕が尻尾を振ると、ユナは顔をくしゃくしゃにして涙をこぼした。

なんでなのかな？
僕はこんなに嬉しいのに、ユナは悲しいの？
僕、何か悪いことしちゃったのかな？

ユナ、泣かないで、君の涙を僕が消してあげるから。
僕は一生懸命ユナの涙を舐める。
悲しいことがなくなるように。
寂しくないように。

そしたら、ユナが僕を抱っこして言うんだ。
「わんちゃん。ずっと一緒だからね。
寂しくさせないからね。ユナのおうちにずっといていいんだからね」

後で知ったんだけど、涙って悲しいときだけじゃないんだって。
嬉しいときも、涙ってやつは出るんだって。
ニンゲンって不思議だなって思ったけど、
僕のこと、好きだから泣いてくれたんだよね？

だから僕、ユナのことが大好き！

――ユナは、僕のこと、今でも好き？

no. 3

次の日、僕に名前が付いた。

ユナも、おかーさんも、おとーさんも、
僕の名前を一生懸命考えてくれて、
いろんな名前を呼ばれたけど、ユナが付けてくれた名前に決まった。

僕の体は真っ黒で、胸のところに白い線がある。

そこから考えてくれたんだって。

ユナが決めた名前なら何だっていいと思ったけど、
僕、その名前の響きがすごく気に入ったんだ。

名前って、なんだかくすぐったい。
恥ずかしいような、誇らしいような、
なんだか変な感じだ。
ボクはみんなに『ボクの名前はユナが付けてくれたんだよ』って、
大きな声で言いたいくらいだった。

ユナが僕を呼ぶたびに、嬉しくて、大好きで、ホントに嬉しくて。
僕はそんなに広くない庭をぐるぐると駆けた。

うっかり回りすぎて、ふらふらになった僕をユナが、
大きな声で笑う。

僕は笑う代わりに、尻尾をぶんぶん回す。
楽しくて、嬉しくて、大好き。

もっと名前を呼んで！
ユナが付けてくれた、僕の名前を。

僕の、僕だけの名前！

「ライン！　おいで！　」

ユナが僕を呼ぶ。

僕はユナの声を聞いて、風のように急いで駆けていく。
夏の草がさらさらと揺れて、土の匂いがした。

僕は、ユナが大好き！！
ユナ、僕のあの黄色いボールを投げてくれる？
そうしたら僕、
大好きなユナの為に、ボールを持ってくるよ！

――ねぇ、ユナは、僕のこと、まだ好き？

no. 4

ある日、空から綿みたいなものが落ちてきた。

僕はそのとき、いつものように大好きなユナの帰りを待っていたんだけど、

僕の鼻のところに、そいつが落っこちてきたんだ。

そいつはひんやりと冷たくて、

僕はびっくりした。

空を見上げると、その白いやつは後から後から落っこちてくる。

僕はそいつに向かって吼えた。

なんだ！　お前は！

そういいながら、僕はそいつを捕まえようとする。

ぱくっと口の中に入ったので、僕は得意げに胸をはった。

あれ？

そいつはいつの間にか、僕の口から居なくなってしまった。

なんで？　どうして？

僕は訳がわからず、闇雲にその白いやつをパクパク食べてやった。

でも、白いやつは僕の口に入っていないみたい。

おかしいな？
僕は夢中になって、白いやつを捕まえようとする。

「ライン。ただいま」
僕はユナの声を聞いてはっとした。
大好きなユナがガッコウから帰ってきたら、
一番に「お帰り！」って言うのが僕の日課だったのに。
そんな大切なことを、忘れてしまうなんて。
僕は急に寂しくなって、尻尾を下げた。

そうしたら、ユナはにこりと微笑むと、
僕の頭を撫でながらこう言った。
「雪が降ってきたね！
どんどん降って、積もるといいね。
そしたら、雪であそぼ？」

そう言うと、ユナはそっと手を伸ばす。

ふわり、と白いやつはユナの手のひらに乗った。

「見て、ライン。
これが、雪だよ」

ユナは僕にユキってやつを見せてくれた。

白いやつはゆっくりと、ユナの手のひらで融けていく。
僕はそれが不思議で、ユナの手のひらごと、ぺろりと舐めてみた。
ユナの手のひらは少ししょっぱくて、
それからユナの匂いがした。
ユキの味はよく解からなかったけど、
ユナが笑うから、僕も尻尾をぶんぶん振った。

それから、ユキは、あちこちに白い色をつけた。

足で踏むと、サクっていう音がして、
足の裏がひんやりする。
僕はユキの匂いを嗅ごうと、ユキに鼻を突っ込んだ。
びっくりするほど冷たくて、僕は思わずくしゃみをする。

ユナは笑いながら、さらさらのユキを風に飛ばして見せた。

キラキラと光るユキはとてもきれいで、
僕は思わずジャンプして、ユキを捕まえようとする。

あぁ、なんて面白いんだろう！
キラキラのユキ大好き！

まぶしいユキと、大好きなユナ。

ねぇ！　僕はユナのこと、本当に大好きだよ！！
――ユナは、僕のこと、好き？

no. 5

ユキが融けていって、気が付くと、かわいらしい緑の葉っぱが芽吹いた。
そう。ハルって言う季節になったんだ。

ハルの柔らかな風が、僕の鼻先をくすぐる。
甘い、花の匂い。

ねぇ、ユナ。
気持ちのいい季節だね。

お日様はぽかぽかしていて、
僕の黒い毛なみも、ほこほこの太陽の匂いになる。
僕は寝そべりながら、ふわぁっとあくびをした。

おかーさんはお布団を干し終わると、
「いい天気ね」と言って、僕の頭を撫でた。

そう。
とっても、とってもいい天気。

だけど、
僕はちょっと寂しかった。

ユナはショウガッコウって所から、
チュウガッコウって所に毎日行くようになった。

その、チュウガッコウって所に行くようになってから、

ユナの帰りが遅くなったんだ。

ガッコウから帰って来たら、僕との散歩の時間だった。
でも、最近はおかーさんが連れて行ってくれる。

おかーさんも、おとーさんも好きだけど、
僕の一番はユナ。

だから、ユナと遊べなくなって、僕はちょっと寂しい。

ガッコウなんて、行かなければいいのにって思う。

でもね、
僕、
お休みの日ってのがあるのを知ってるんだ。

その日はいっぱい遊んでくれるって、僕は知ってる。

だから、
僕はお休みの日を、とてもとても楽しみにしているんだ。

ユナが
「ライン、明日お休みだから、いっぱい遊ぼうね」
って言うと、僕は尻尾を思い切り振る！

僕はユナのこと、大好きだよって！

僕も明日が楽しみなんだよって！！

いっぱい、いっぱい遊ぼうって！！！

ユナ。
ユナ。
ユナ。

僕の頭の中は、きっとユナでいっぱい。

だって僕、ユナのことが、すごく大好きなんだもん！！

大好き！　僕の大切なユナ！

ねぇ、僕といつまでも、一緒に居てくれる？

僕、ユナのこと、すごく大切で、大好き！！！

――でも、ユナは僕のこと、どう思ってるのかな？

ハルの終わりを告げる、
爽やかな夏の風が、僕のひげを揺らしていった。

no. 6

僕は寂しくて、退屈で、悲しかった。

大好きなお休みの日。
すごく待ち焦がれていた、あの日。
今も待ち焦がれている、お休みの日。

ユナの、お休みの日がなくなってしまった。

ジュケンってやつがあるらしい。
おかーさんが言ってた。

ユナは朝早くガッコウに出かける。
夜、遅くに帰ってくる。
毎日、この、繰り返し。

僕の頭を撫でることも、
僕の名前を呼ぶこともあまりなくなった。

ユナ。
ユナ。

僕のこと、嫌いになったんじゃないよね？

僕はユナのサンダルの匂いを嗅ぐ。

ユナ。
ユナ。

最近は僕の匂いでいっぱいになってしまった、
ユナのサンダル。

微かに感じるユナの匂いを頼りに、
僕は目を瞑って、ユナとの思い出に浸る。

どうか、夢の中だけでも、ユナと遊べますように。

僕はユナのサンダルに鼻を突っ込みながら、
浅い眠りについた。

夢の中では、ユナが
僕の黄色いボールを青空に向かって投げていて、
僕は嬉しくて。
すごく、すごく嬉しくて、
僕は尻尾をぶんぶん振りながら、ボールを追いかけて。

とても、とても幸せだった。

けど、
目が覚めると、悲しくて、切なくて、苦しくなる。

寂しいよ。
寂しいよ。
ユナ、寂しいよ。

僕はユナのサンダルに、あごを乗せて目を瞑った。

ねぇ、ユナ。
ジュケンって言うのが終わったら、
僕と遊んでくれるよね？

大好きな、ユナ。

僕、いい子にして、
ちゃんと待ってるから。

――ユナは、僕のこと、好き？

no. 7

うれしい！
嬉しい！！！

僕は公園を跳ね回った。
ユナはそんな僕を見て、目を細める。

ユナ！　僕、すごく幸せだよ！！

少し薄汚れてしまった、僕のお気に入りの黄色いボールを
ユナは空へ投げる。
ボールはゆるい放物線を描いて、飛んでいく。
僕はボールを追いかけて、
風のように走り出した。
早く。
一秒でも早く、ユナにボールを届けるために。

僕はユナと久しぶりに遊んだ。

ジュケンって言うのが終わって、
ハルヤスミって言うのになったんだって。

ユナは毎日僕と遊んでくれる。

僕は嬉しくて、嬉しくて。
楽しくて、楽しくて。

ユナに名前を呼んで欲しくて、
頭を撫でてもらいたくて、
大好き！　って判ってもらいたくて、
いつもよりたくさん尻尾を振る。

僕のこの、ユナへの気持ちが
きちんと伝わるように。

ユナは僕の名前を呼んで、
まるで子犬の頃のようにきゅっと抱きしめた。

「忙しくて、あんまり遊べなかったね。
ごめんね、ライン。
私、ラインのこと、大好き！！」

ほんと？

僕のこと、大好きなの？

僕は嬉しくて、ユナのほっぺたを舐めた。
尻尾も、さっきより勢いよく振った。

ユナが僕のこと、大好きだって！！
僕もユナのこと、大好きだよ！

あぁ、なんて素敵な日だろう！
僕、ユナのことが大好きで本当によかった！！

僕、この日のことは絶対、絶対忘れないよ！！

僕がもし、ヒトだったら、
きっと、嬉し涙を流すだろう。
あのときの、ユナみたいに。

昨日より、暖かくなった風が、
僕らの傍らを通り過ぎた。
もうすぐ、何度目かのハルの季節になる。

――ねぇ、ユナ。
本当に、僕のこと、今でも好き？

no. 8

あれから、
季節はいろいろ移り変わった。

ユナはダイガクって言う所に、行くことになったんだけど、
ヒトリグラシってやつを始めなきゃならないらしい。

そう、ユナは教えてくれた。

僕は、そのとき、何もわかっていなかった。

ユナに頭を撫でられていた僕は、
そのことが嬉しくて、尻尾を振った。

ユナはそんな僕を見て、
寂しそうに微笑む。

ある晴れた日、ユナは大きなバックを抱えて、
僕の頭を撫でた。

「ライン。行ってくるね」

僕は「早く帰ってきてね」と、ユナの足の辺りに絡みつく。

ふと、顔を上げると、
ユナの目には、いっぱいの涙が浮かんでいた。

――そして、僕は知る。
ヒトリグラシって言うのは、
ユナがおうちに帰ってこないってことなんだって。
僕は、ユナを待った。
ユナがくるのを待った。
雨の日も、風の日も。
僕はユナのことを、ただただ、待っていた。
「ライン！　ただいま！」
そう言って、僕の頭を撫でてよ。
僕をぎゅっと抱きしめてよ。
そのあと、散歩に行って、色んな景色を見ようよ。
公園に着いたら、あの黄色いボールを投げてくれる？
僕は風みたいに速く走るから。

だから、
だからそう、
早く、早く帰ってきて！！
さみしいよ。
会いたいよ。
ユナ、どこに行ってしまったの？

僕を置いていかないで。
僕のこと、嫌いになったの？
それなら、僕にそう言って欲しかった。
僕は、ユナの匂いがすっかりなくなってしまったサンダルに
ユナの面影を求める。
辛いよ。
苦しいよ。
切ないよ。
いつまで待っていれば、ユナに合えるの？

でも、それでも、
それでもやっぱり僕は、
一番、
この世界で
誰よりも
ユナが大好き。

――ユナ、僕はユナに、もう一度会うことができる？

no. 9

ある日、僕は懐かしい足音を聞いた。

ユナ？

ユナの足音？

真夏の太陽がぎらぎらと照りつけ、
蝉が狂ったように鳴いていた、午後のことだ。

僕は足音をもっとよく聞きたくて、
耳をぴんと立てて、目を閉じる。

でも、
蝉の音は途切れることなく、
僕の邪魔をする。

僕は、じれったく思いながら、
微かに聞こえる足音を注意深く聞いた。

足音が、
だんだん
近づいてくる。

懐かしい音。

少しかかとの辺りを擦りながら歩く、あの独特の足音！

大好きな、ユナの足音！！

不意にユナの足音の速度が上がった。

僕は居てもたっても居られず、
道路がよく見えるあたりで、何度もジャンプをする。

少しでも早く、ユナを見つけたいから。

僕にくっついている鎖は、
太陽の光を浴びて、
きらきらとひかり、
鉄と鉄がこすれあう音は、
まるで僕を祝福してくれているようだった。

「ライン！　ただいま！！　」

ユナが息を切らして、家の門を開けた。

「早くラインに会いたくて、走ってきちゃった！　」

額にある大粒の汗は、太陽の光を浴びてきらきらと光る。
ユナのひまわりみたいな笑顔に、僕は尻尾を振って答える。

おかえり！
お帰り！　ユナ！！
僕、いい子にして、待ってたんだよ！
会いたかったよ！

会いたかったよ！！ユナ！！

ユナは僕を抱きしめて、
頭をなでて、名前をたくさん呼んでくれた。
僕はうれしくて、たまらなくて。
ユナの胸の辺りに体をこすり付ける。

大好き！

大好きだよ！！

この大切なときを、僕は忘れない。

ユナに合えたこと。
それは、本当に僕にとって宝物だったから。

ねぇ、ユナ。
ユナが帰ってしまうとき、
ユナの靴を隠してしまってごめんね。

僕、どうしてもそばに居て欲しかったんだ。
靴がなければ、お外にいけないから、
僕のそばに居てくれるんじゃないかって、
そう、思ってた。

ごめん。
ごめんね、ユナ。

ユナを困らせるつもりは、なかったんだ。
ユナが大好きだから、
大好きすぎて、そばに居て欲しくて。

でもね、もう
わがままは言わないよ。

だって、ユナの困っている顔は、
見たくないから。

ユナ、ユナ、ユナ。
僕の大切なユナ。

こんな悪い子の僕だけど、
僕のこと、まだ好きで居てくれる？

no. 10

「ライン！　ライン！」

不意にユナの声が、耳元で聞こえた。

――あぁ、そうだ。

僕は今、ユナと一緒だったんだ。

ぼんやりとした頭で、僕は思った。

ねぇユナ。

僕、今まで夢を見ていたんだよ。

ユナとの思い出のいっぱい詰まった夢を

僕はユナにそう伝えたくて、

尻尾を振ろうとする。

あれ？　変だな

僕の体は、

まるで、僕のものではないみたいに、

うまく動くことが出来なかった。

ユナは僕の体や頭を撫でて、

顔をくしゃくしゃにして、涙を溢した。

ユナ。

僕、なんか変なんだ。

ユナに大好きって、
いっぱい
いっぱい伝えたいのに、
どうしても、
伝えることが出来ないんだ。
僕はユナを見る。
ユナは僕の目を見つめた。
そして僕をぎゅっと抱きしめて、
ユナは震える声で、僕に優しく語り掛ける。

「ライン。
もっと一緒に、遊べばよかった。
もっとそばにいればよかった。
こんなに大好きなのに……
もっと大好きって言えばよかった。
ライン。
お願い、私を置いていかないで。
もっとそばにいて。
ライン。ライン……」

ユナ。

僕は、幸せだったから。

ユナに会えて、
すごく楽しくて、嬉しくて、
ホントに幸せだったから。

だから、
泣かないで。

僕は、ユナの笑顔が大好きなんだ。

ユナの涙を、
僕は優しく舐める。

僕には、もう時間がない。

気が付いたんだ。

僕は、もう死んじゃうってことが。

泣かないで、ユナ。

僕は、もう少しで、居なくなってしまうけど、
今までのことは、きっと、忘れないから。

僕の、大好きなヒト。

大切な、ユナ。

僕は、幸せだったから。

ユナと居れただけで、
すごく、すごくしあわせだったから。

だから、
悲しまないで。

僕は、最後に尻尾を振った。
前みたいに、思い切りは無理だけど、
ユナに、大好きって伝えたかったから。

――ユナ、僕はユナが大好きだよ――

夏の終わりを告げる、
秋の虫たちの声を聞きながら、
僕は、そっと目を瞑った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8970h/

ボクの大好きなヒト

2010年10月9日04時50分発行